

はじめに

本書は、山形の豊かな城が語る、戦国世界を考えたものである。その要点を述べよう。

第1部の「山形の城を考える」では、個別の城を取りあげ考察している。最初に、最上義光の山形城整備を取りあげた。北野博司氏は、昨年(二〇二三)、最上氏時代の山形城絵図と評価されてきた、「最上家在城諸家中町割図」が、最上氏時代の本丸・二の丸と、後の正保城絵図とを合成し、「最上氏分限帳」の武将を書きこんだ、編纂図であると発表した。私は、それをうけて、涌谷巨理家伝来の「最上山形之図」を取りあげ、齋藤仁氏が指摘した慶長五年段階の、最上氏時代の山形城絵図と考えられるとした。その絵図から、最上義光は、戦国時代山形城を全面的に改修した近世山形城を造らなかつたこと、

後に三の丸となる惣構えは、慶長五年の出羽合戦での築城とし、山形城下町は、慶長十年頃に整備されたと考えた。

また、近世山野辺城では、最上義光の子、山野辺義忠は山形御所の出自で、端正な方形の城を築くはずだが、山野辺城はそうでなく、高楯氏の築城と推測した。ここで指摘した山形御所の城とは、室町幕府の將軍御所と同じ方形プランで、それに、最上義光の子、義康か家親が造つた二重方形輪郭式の近世寒河江城と、最上義光の弟、長瀨義保の造つた、近世長瀨城があげられる。

そして、山野辺義忠の山野辺入部は、慶長六年説を通説とするが、栗野俊之氏は、元和三年(一六一七)までは楯岡城主で、元和三年に山野辺に入ったとする。楯岡氏

菩提寺の祥雲寺記録にもそう書かれ、栗野説が妥当と考
えられる。そうすると、近世楯岡城の築城主は、山野辺
義忠となり、元和八年まで五年しかいなかった楯岡光直
が、近世楯岡城を造れたのかという、疑問が解消するこ
ととなる。

次の、第2部「城が語る山形の戦国世界」では、最上
小国地方、尾花沢・大石田地方、庄内地方を取りあげた。

最上小国地方は、私の初めての城歩きの地で、悉皆調
査をしたところである。この地に、全国的にみても豊か
な城世界があり、それは、戦国時代に、山と川による恵
まれた自然に支えられた豊富な生業があり、多彩な歴史
が展開され、各地に城が造られたことにあると考えた。

また、尾花沢・大石田地方は、私が初めて城の悉皆調
査をした地である。ここでは、領主の城を取りあげ、天
正十年（一五八二）に、国人領主、有力な在地土豪、村に
基盤を置く在地土豪が各地に割拠し、由利十二頭と同じ
世界が展開されていたと考えた。その世界が消失するの
は、天正十二・十三年の最上義光による、従わない豪族

衆を徹底的に掃討した最上下郷仕置きで、その後は、延
沢氏と牛房野氏、義光が入れた寺内氏、行沢氏、新館氏
が、城主になったと整理している。

また、庄内地方の戦国世界は、史料のない時代、戦争
の時代、地方の時代、交流の時代とし、庄内戦国の画期
は、天正十一年（一五八三）、大宝寺義氏の自刃と考えた。

第3部「山形の城を歩く」では、私の歩いた城の紹介
である。そのうち、上山市陣山楯は、『最上斯波家伝』
が、「高畠二井宿から進攻した、上杉軍千人が、陣山に
陣を置いた」と書くことから、上杉軍の陣城としている。
また、西川町吉川楯は、階段状曲輪と多重帯曲輪をもち、
切り岸は高く鋭く、天正十二年（一五八四）、最上義光に備
えた、国人吉川氏が築城した戦争用の城と考えた。

第4部の特論では、山形の階段状曲輪をもつ城を取り
あげ、最上の山城の特徴とした。また、追悼報告として、
川崎利夫氏との城研究を述べている。

それでは、城が語る山形の戦国世界に案内しよう。